

令和元年度 板橋区青少年問題協議会（第一回専門部会）

開催日時 令和元年 7月 25日（木） 午後 6時 30分～

開催場所 板橋区役所南館 6階 教育支援センター研修室A B

出席者

東京家政大学人文学部教授	平 戸 ル リ 子
法政大学キャリアデザイン学部教授	児 美 川 孝 一 郎
教 育 委 員	松 澤 智 昭
区立小学校校長会	浅 見 智 則
区立中学校校長会	関 実
民生・児童委員協議会 主任児童委員部会長	島 村 恵 子
NPO 法人青少年自立援助センター	山 本 依 里 子
フリースクール@なります代表	久 保 正 敏 子
地域教育力担当部長	松 田 玲 子

出席職員（幹事）

板橋福祉事務所長	浅 賀 俊 之
指導室長	門 野 吉 保
地域教育力推進課長	諸 橋 達 昭
大原生涯学習センター所長	的 野 信 一

オブザーバー

東京都教育庁地域教育支援部主任社会教育主事	梶 野 光 信
教育支援センター所長	平 沢 安 正
成増生涯学習センター所長	齋 藤 真 哉
社会教育指導員	戸 張 隆 次

【開会】

- ・挨拶
- ・資料確認
- ・専門部会進行説明

【議事1】グループ討議

研修室Aグループ

諸橋課長（地域教育力推進課長）

居場所の拡充という方向性の中で不登校が中心となると思います。このグループの座長を平戸委員にお願いしたいと思います。平戸委員よろしくお願いたします。

平戸委員（東京家政大学人文学部教授）

不登校がテーマなのですが、これまで様々な意見が出ております。今回、先日の全体会で交わし切れなかった部分について追加意見をいただいております。例えば、片岡委員からは低学年の早い段階から不登校になってしまう理由として、家庭環境が非常に大きいというようなことを指摘されております。今回の皆さんのお手元に別紙としてチャート表が配られておりますが「家庭環境に問題が無いか」とか、それを含めた「地域に問題が無いか」といった部分も挙げております。これに関しては、島村委員も盛んにおっしゃっており、避けては通れない課題だとは思いますが、限られた回数の中で、もう一つのグループとの関連性を考えますとまずできることは何だろうかということ、少しでも前進するための本部会のテーマとか方向性ということで、子どもたちのチャンスを増やしていきけるような場所とか子どもたちが安心して過ごせる場所をどうやって作り上げていけるかといったことあたりが、Aグループの方の方向性だと思います。もちろん、早い時期からの家庭を巻き込んだというところに触れないというわけではなくて、そこに触れていただいて構わないのですが、できたら居場所というものを様々な方たちが協力して充実させていくという方向で皆様方のご意見を頂戴できればと思っております。長くなりましたが、忌憚のないご意見を頂

戴できればと思います。よろしくお願いいたします。

久保委員（フリースクール@なります代表）

居場所がないと社会との接点が失われてしまうという印象があります。学校から離れてしまうと主とした居場所がないということが課題として挙げられるのではないのでしょうか。居場所の選択肢としてあいキッズという話もありましたが、多くが学校の敷地内にあるということなので、学校に行くことが難しい子に対しての居場所としては難しいのではないかなと思います。それでは、他に何かあるかというとなかなか難しいのですが、うちみたいなフリースクールが居場所として機能していると思いますし、最近話を聞いたところによると子ども食堂とかそういうところに不登校の子どもが来ているといった話も聞いています。また、親御さんの気持ちとしては、学校へ行かずにずっと家にいるよりは、どこかに居場所があれば、そこへ行って欲しいと考えて、学校以外の居場所を探してくる様です。ですが、学校以外の居場所に関する情報を知らない親御さんは、行き詰まっているようですし、実際に情報が届いている家庭は少ないと思います。

平戸委員（東京家政大学人文学部教授）

例えば、外と関わろうとするときの情報はどうやって入手しているのでしょうか、また探せてない方の問題とかどういうかたちで情報を得ているのでしょうか。ひきこもってしまうと社会から孤立してしまうお子さんが多いと感じていますがそこら辺どうでしょうか。

浅見委員（小学校校長会会長）

居場所の線引きなのですけども、教室には入れないけど保健室登校は可能という子もいるため、校内までこられるというのはだいぶ近づいてきているという状態なのかもしれません。学校として1番代表的なのが保健室登校ですけれども、板橋にはあいキッズがありますので、教室に誰もいないようなら通えるという子たちも中には

おります。学校が難しいのならば、学校と学校以外の居場所という風に校内と校外を分けて考えていくと良いのではないかとお話しを伺っていて感じました。

平戸委員（東京家政大学人文学部教授）

あいキッズは校内の居場所という認識で、学校に近づけるようになってからの利用という認識ですね？

浅見委員（小学校校長会会長）

はい、あいキッズは板橋区独自のものですから、板橋区が取り組むステップの中に取り込めるのではと思います

平戸委員（東京家政大学人文学部教授）

あいキッズですとか、校外と校内ということで考えてというご意見いただきましたが、その辺も踏まえていかがでしょうか。

戸張氏（まなぼーと成増 社会教育指導員）

家を出られない子が非常に多くなっています。小・中学校において、ひきこもっている子どもたちに、大人としてやるべきことがたくさんあると感じております。そのために、このような会議をやっているのだと私は思います。そのような不登校の子どもたちに「学校以外にもこのような居場所があるよ」ということを知らせるのは、とても大切なことで、必要なことだと思います。そして、その学校以外の居場所を伝えるのは、学校側の役目だと思います。「君たちを受け入れてくれるこのような居場所に行ったらどうだ」という情報を月に1回は様々な方法を使って、お子さんあるいは家族の方に伝えることができれば良いと思っています。それでは、どういふところが不登校の子どもたちの居場所かということ、児童館や図書館、まなぼーと大原、まなぼーと成増、エコポリスセンター、教育科学館などの公共施設です。児童館は乳幼児を対象としているから、不登校の子どもの受け入れはできないという考え方をひっくり返して、大人がいればどこでもオーケーだと私は思うのです。で

は、誰が周知するかと言ったら、先ほども言いましたが、やはり学校の先生です。あるいは、友達を通してです。しつこいくらい何回も何回もプリントを渡すのです。月に2回は必ずやるのだと決めて、無駄になってもいいから「こういうところはどうですか？」と同じものでもいいから渡すことが大切だと私は思っています。

それともう一つ、この組織自身が縦割り行政といったところにも、共通理解、共通実践することにおいて、難しい点があると思います。児童館は子ども家庭部、図書館は教育委員会の中で別組織であり外部委託をしています。まなぼ一とは生涯学習課、この会議は地域教育力推進課で、それぞれの組織には縄張りや取り決めがあるのは当然で、これが1つの大きな壁になっているように思います。ただ、縦割り行政の良い部分もあるので、それらが膝を突き合わせて、柔軟な連携が取れば良いと思っています。

平戸委員（東京家政大学人文学部教授）

本協議会の構成メンバーや専門部会のオブザーバーの方々は現場や社会福祉・社会教育に携わられている方がいて、様々な分野に対し偏りなく選ばれていると思います。ただ、実際に行政で利用できる機関をというふうに考えていくと、行政ならではの縛りみたいなものが強く、その壁の中で利用しづらいというところがあるあたり、1つのご意見として承ってよろしいでしょうか。

戸張氏（まなぼ一と成増 社会教育指導員）

はい、結構です。

平戸委員（東京家政大学人文学部教授）

一般的に児童館の利用可能年齢の幅については広くしているようなのですが、板橋の場合は年齢層は抑えられているのでしょうか。

諸橋課長（地域教育力推進課長）

板橋の場合は特別で小さい子に向けて児童館の対象を意識的に下げています。利用してはいけないということはないのですけれど

も、以前は卓球台もあって小学生がたくさんいて、遊びに来れたところが、遊び道具や卓球台も撤収しちゃったので来ていいよといわれてはいるのですが、行っても面白くない。実際は乳幼児も来ますから、利用してなくはないのですが、逆に昔のように子どもが溢れるような状況ではないため、何人かの子どもが来るというところではもしかしたら静かな場になっているかもしれません。そういったところで、禁止はされてないですが、遊び道具が撤収されているという状態が板橋区の児童館です。

島村委員（民生・児童委員協議会 主任児童委員部会長）

今、児童館の話が出ましたが、不登校のお子さんについて児童館に協力をお願いしているお子さんもおります。また、あいキッズなら行ってもいいというお子さんもいます。放課後、あいキッズに参加した際、子どもの健康確認を学校側でしていただくということも実際にはあります。あいキッズに足が向かないお子さんは児童館の先生方と連携しています。「今週はこのくらいの割合でいらしてましたよ」、「児童館に来られる日はきっと学校に行った日なのですね」など、児童館での様子を電話で教えていただくこともあります。また、学校での学習で理解出来無かった部分を児童館の先生にちょっと教えていただいたりもしている様です。不登校のお子さんの中には、児童館がとてもいい居場所となっていて、お友達を誘いながら児童館を利用している子もいます。児童館はあくまでも児童の居場所なのですが、保護者の中には小学生はあいキッズがあるので児童館を利用できないのではないかと勘違いをしている節があります。しかし、児童館は本来児童の居場所ですから、子どもたちの居場所としてしっかりスペースを確保しており、そのことを周知できればと思います。保健室登校や、あいキッズという話がありましたが、実は行政が運営していない子どもの居場所となる地域の資源が多々あると思います。基本的にそういう地域の資源はなかなか一本化されておらず、地域資源の情報を整理することで新たな居場所の情報発信となるのではないのでしょうか。小学生の不登校家庭の親御さんには身近な居場所が大切です。子ども食堂は社会福祉協議会

が管轄、児童館は子ども政策課が管轄しています。悩み困った親御さんが相談に来るのは教育委員会にも関わらず、持っている情報管理がばらばらのため、必要な情報を速やかに渡せていないのではないかと大変気掛かりです。情報は必要な人に届かないと意味がありません。フレンドセンターや i-youth、まなぼーとのチラシがあります。その他にも、教育科学館では夏休みは多数の学習会があり、またエコポリスセンターでも多岐に渡る体験や実験など実施しています。しかし、地域資源として開催されている活動は不明で、その情報も親御さんのところには届かない、また情報を探す場所が分からないなど、情報の共有できる仕組みが必要だと思います。不登校のお子さんは学校からの資料もなかなか届きづらいのかもしれませんが、主任児童委員は学校長からの依頼で支援活動を行いますので、学校からの情報提供として資料を届けること、見つけた地域資源を学校にお知らせすることなど、両者との関係性をつなぐ方法の一助として努めたいと思います。

平戸委員（東京家政大学人文学部教授）

先ほど戸張委員から、できれば月1でも月2でもいいから、学校から情報をとというご意見ございましたが、今の島村委員のお話を伺いますと間に主任児童委員が入って情報を伝えてくださるということも十分あるということで、そこらへんの情報共有化は二通りあると私は思いますが、今ある社会資源をどうやって使っていったらいいかということをはかして当事者である子どもや親御さんも含めて伝えていくか、それが行政の縦割りではなくて、こんなところもあるよというかたちで伝えていくかという一本化の意味と、ある意味でこのあたりで子どもさんがつまずいているという、例えば相談に来て初めて親御さんの様子から何か伝わってきた様子に関係者が理解をするという意味の一本化というものもあると思います。いろいろな方が力を合わせるときの協力体制というのにも必要かと思えます。その一方で行政が縦割りなのは守秘義務という問題もあるのか、当事者の情報の共有化に関する壁の高さもあるということをはかり考えていかなければいけないのかなと思います。ただ情報提供

に関しては、こういう会とかでいくつか必要な機関を出し合っていく中で、まずは資源を的確に伝えていくということはとても必要なことで、例えば先ほどの児童館にしても、利用しづらいという意見も出ている中で、利用してよいということを伝えていく、またもっと利用しやすいように変えていくなどを検討して行けたらいいかなと思います。月1の情報提供はぜひ学校からというあたり、浅見委員はどう思われますか？

浅見委員（小学校校長会会長）

保護者と話せる状況であるのか、子どもに会える状況であるかどうか。そのあたりでちょっと違うと思いますが、不登校に限らず保護者に相談する機会というのは結構あります。その際に気を付けようとしているのが、子どもを飛ばして相談しないということです。つまり、保護者が勝手にこれがいいのじゃないかと決めてしまって学校と親が決めて、これでどうというのはやっぱり子どもは納得いかないと思います。やはり保護者が伝えられる状況でしたら保護者の方にはそういう情報を伝えて、いってもらえばいいし。放課後だけなら来られるというお子さんの状況でしたら呼ぶだけ、そこでほんとに担任とこんなのもあるよと教員が直接話してあげるのもいいでしょうし。その状況、状況は違うと思いますが情報を与えることは十分に可能だと思います。

平沢委員（東京家政大学人文学部教授）

平沢所長はいかがでしょうか？

平沢所長（教育支援センター所長）

青少年問題協議会という大きな会議のオブザーバーとして、あえて反論するならば、この資料の「不登校は問題なのか」という定義そのものが私のような不登校の子供たちを支援する立場の者からすると違うと考えています。3年前に文科省が不登校は問題という考え方を改めるべきとの通知が出されています。その視点で考えると不登校は1つの選択肢でありその子がどういう選択肢を選ぶか、そ

の選択肢に私の所管であるフレンドセンターが入っていければというふうに思っています。これまでのフレンドはとにかく学校に戻さなければというような使命感があって、しかも中学校だった建物を利用していることから、学校そのもののような雰囲気職員室があって、入るときにはロックしておはようございます、失礼しますということをやっていることをやっていました。適応指導を多層的に考えたときにも学校に戻るときに必要なステップの1つだという考えに立った適応指導を行ってきました。現在、この4月から一切そういうことをしない方向でやっています。学校復帰を中心に考えず社会に戻るためのベースキャンプという発想を持ち不登校の子供たちには学校の雰囲気でごめんね、でも中はすごくあったかいのだよというふうに変えようとしています。フレンドセンターは心を癒しながら、学校に戻る際の最大の障害と言われている学力についても、サポートする体制でいます。ここには学校の教員がいますので、そのハードルを飛び越えようとするれば、勉強の道具もあるし教えるプロもいるからということです。以前のフレンドセンターは学校という頂上アタックのための2次キャンプ、3次キャンプだったのですけれども、今は社会へ出ていくためのベースキャンプにしようというふうに変えてきています。その発想は冒頭申し上げた不登校は問題じゃないのだという発想に立っています。これから私がオブザーバーとして参加する意味はそこにあるかなと思います。不登校は社会的な問題ではあるが、その子とその家庭にとっては1つの選択肢であるというふうにこの会議の中でも思っていただけに私は発言していくことになると思います。フレンドセンターがどう変わりましたかということに関しては情報提供できますが、不登校の問題解決というような大所高所の視点からの意見を求められても、私は多分発言ができなくなってしまうかもしれません。その発想をぜひもう一度親会のところで議論いただくことをオブザーバーとして提案したいと思います。不登校にある子どもたちの具体的な居場所という視点で、発言すれば先程申し上げたように、これまでのフレンドセンターは学校に戻すことを目的とした居場所でした。これからの適応指導は、社会に戻るためにどういう選択肢を取るか、不登校

以外の選択肢としてフレンドセンターを提供するという発想です。そのためにフレンドは通い易くないといけないし、ありとあらゆるハードルを取り払って、とにかく来てくれればいいよという視点に立ちます。その視点に立ち、距離的な通いやすさの拡大でまなぼーと成増をお借りして分室を開設します。フレンドの分室ということで9月から新たに動き出します。そこに新たな学校への中間地点を作るといふ発想はもう教育支援センターには無いです。不登校ということを選択したけれども、やはり学校へ戻ろうと思ったときには勉強の遅れが大きな課題となりますし、社会に出て他人と接触するコミュニケーション力も必要となります。その子の状態によってこの資料の表は4つの項目全部が違ってくると思います。一人ひとりがどんな理由や背景から不登校という選択肢を取ったかによって様々なサポートが求められます。その理由や背景からそれぞれの行政がやる事はあるのではないかと思います。フレンドセンターがここにある価値は、親御さんは学校に戻ってほしいという思いに応えるという側面もあると思います。フレンドに通わせれば学校に戻れるのじゃないかという親御さんのニーズはすごく高いと思います。その受け皿ということフレンドはやらざるを得ない、必ず親子の面接をして一人ひとりカルテを書いてニーズに合った支援をしていこうということを考えています。現在SSWは役所の中にいますが、午前中フレンドのほうに行ってみて様子を見てどういう風にニーズに応えていくかという、SSWがコーディネーションをするというシステムを9月からつくっていかうとしています。

平戸委員（東京家政大学人文学部教授）

ちょっと教えていただきたいのですが、今までは親御さんにとっては学校に戻すためのステップという印象を持たれていたのでしょうか。

平沢所長（教育支援センター所長）

逆だと思います。もともとは、親御さんの学校に戻してくれとい

うニーズでフレンドができたと考えています。

平戸委員（東京家政大学人文学部教授）

今度の9月からは、そういう方向性とは違うことに取組まれるようですが、それは実際にやってみて、そうではなかったからなのでしょうか。

平沢所長（教育支援センター所長）

今は66人が登録しています。その中で圧倒的に多いのが中学3年生で、そのニーズはやはり進学にあります。そのためには勉強が必要だけど、学校には行けないから、フレンドで勉強しようというニーズはあります。フレンドセンターはその子のニーズに合った支援します。桐ヶ丘高校とかチャレンジスクールとか入試がなかったり、ゆったりとしたカリキュラムの高校だったり、子どもの選択肢も学校と協議しながら提供していきます。別の形の支援として、スタジオジブリのプロデューサーを呼びました。フレンドセンターにはアニメ好きの子どもが多く通っていますので、その子たちの作品をプロデューサーに見てもらいました。その場では、私の前では一言もしゃべらない子どもがジブリのプロデューサーの前だと黒板の前に立って絵を書いたりするのです。唐突にしゃべったり。そういうスイッチを子どもたちに入れてあげるということは、親御さんの学校に戻したいというニーズとはちょっと違うけれど、フレンドに来てくれれば、そういうスイッチを入れてあげられる。そんな機会をいっぱい用意しようと考えているところです。

諸橋課長（地域教育力推進課長）

私からもちょっといいでしょうか。この表を作ったものとしては非常にニヤリとしたところがあるのですけれども、この表、どれも質問形で書いてあるのですけれども、決して答えは一切持ってないのですね。ひたすら皆さんに問いかけをして皆さんから答えを引き出したいと思ってつくったのですけれども、そうすると両極端の答えが絶対あり得るなと思います。今、親御さんは学校に戻りたいと

お話をされて、多分親御さんはそう思いますよね。親御さんは子どもが学校に行かなくなるとすごい不安になると思うのですよね。高校いけなくなっちゃうのじゃないの、大学いけなくなっちゃうのじゃないの、そうしないと社会で食べていけなくなっちゃうのじゃないのとか、人と繋がれなくなっちゃうのじゃないの、友達いなくなっちゃうのじゃないの、そうするとやっぱり社会でうまくいけなくなっちゃうのじゃないのとか、そういういろんな一つ一つの不安な要素に対して、いや学力は大丈夫ですよ学校じゃない場所でもしっかり高校や大学じゃないところでもう社会に出て生きていけるのですっていうところがあるのであれば、それはそれでそういう議論をして、そういう性格の居場所になっていけば良いでしょうし、人間関係についてだって同じで、自分の自己決定で社会人になる前の工程でも良いですし、そういった議論を問いから皆さんが両極端の意見が出る中でどういう居場所が必要なのか、その居場所に求められている機能とかは何なのかなのかっていうところを収斂していきたいという表ですので、決してこれは平沢所長の考えを真逆にもっていくための表ではございません。そういった議論の中で必要な支援がどんなかたち？それは今までと同じものなのか、延長線上にあるものなのか全く違うところなのかというところを皆様の議論の中で収斂していければいいなと思っています。

平沢所長（教育支援センター所長）

親御さんは学校には戻したいのだけれども、不登校を起こした学校には二度と行かせたくないとか、絶対行かせないという。けれど、この子の将来のことを考えたら学校らしきところにいかせなければいけないからフレンドにっていう発想になりますし、諸橋課長の言葉を受けて、もっと究極にいうのであれば、我々、教育委員会で学校教育を担当するものとするれば、不登校をおこさない学校になればいい。そうするとこんなことを一切やらなくて済むという所の議論も必ず両輪としていかないと不登校はどんどん増えますよ。その受け皿とか解決策じゃなくて、根本は不登校がゼロになってしまえば、この会議で不登校の話をする必要はなくなる。そういうこと

も視点に入れていかないとという気がしてきました。不登校ありきだということではないのじゃないかなと思います。

齋藤所長（まなぼーと成増所長）

さらに、その外側の社会教育の立場からお話しさせていただきま
す。私どもまなぼーと成増では不登校交流会を開催しておりまし
て、これは不登校のお子さんの保護者並びに不登校の当事者が集う
場です。そこには学校からやっと逃げてきた保護者には、お子さん
を学校にいかせなくてはならないという非常に苦しい思いをしてき
た方がいます。しかし、それ以外の道があるのだということに気づ
いたお子さんと保護者たちが参加している会です。例えばフリース
クールがあるということに気づくわけなのですよ。そうすると保護
者は子どもを学校に行かせなければならないという責め苦から解放
され、お子さんたちは学校に行かなければいけないけれど、行けな
いというところから解放される。次の道があるのだってということが
わかってきました。そのような方たちにとって学校に戻るという選
択肢は既にありません。そのようなお子さんをまなぼーと成増から
学校に戻すということは、その子の居場所を奪うことになります。
子どもがまなぼーと成増の中で得てきたことはたくさんあります。
先ほど久保委員が学校に行くことが難しい子に対しての居場所とし
て、あいキッズは難しいのではないかとおっしゃっています。7月
13日(土)に開催された板橋フレンドセンター「不登校の子ども気持
ちと進路選択」で不登校経験者が体験談を語りました。その方は、
週1回ピアノを弾きに来ていたのです。はじめは独りでピアノを弾
いていましたが、社会教育指導員は音色でその子の気持ちを察する
ことができるようになりました。そして、その子を見守っている職
員が他の人にも聴いてもらう機会を設けることが、その方の励みにな
るのではないかと思い、いくつかのイベントを紹介しました。その
子の演奏を聴いた方から、心に響くものがあるという感想があり
ました。その子は、次に自分の思いを話せるようになり、学校に行
かない選択をしたこと、高校進学に関しては、いろいろな学校の資
料を取り寄せ、実際に訪問をして、自分で選んだことを語りまし

た。その子は、学校へは行かなかったのですが、社会教育の施設とか、フリースクールなどへ行って、いろいろな人の話を聞いて、自分で進路をつくっていったそうです。学校教育の外側に社会教育があり、多様な学びがあります。世界を見渡すと北欧などでは、必要な時に学校に行っているわけです。いろいろな状況の中で、学校で学ぶことができます。社会教育として、「勉強が遅れるので、学びたい」という不登校のお子さんが学べる場として、まなぼーとでは毎週2回無料の学習塾のような学習支援の場を設けています。まなぼーと成増では、午前中は、乳幼児と親子がいて、お子さんが子どもを抱いたり、さらにシニアの人たちが利用時間内に i-youth スタジオを利用しているということもあります。不登校のお子さんが1番ニコニコするのは、そこに他の不登校のお子さんが来ていた時ですね。大人が一所懸命やっても、お子さん同士には負けてしまうのですね。ぱっと表情が明るくなるのですよ。普段話しているように、「俺、学校行けてないんだよねー」とか「勉強しないとちょっと不安だなあ」というところです。不登校同士のお子さんが会って話すと孤立している状況が解消されてしまうみたいなものです。さて、お子さんが不登校になる要因として、家庭環境に問題は無いだろうかという見方があります。先程、教育支援センター所長もおっしゃったように、家庭環境に問題があるのではなくて、むしろ社会の問題として見ていくほうがよろしいと思います。だから、そこには不登校のお子さんがどのような教育を受けるのかについての情報が必要であると思います。どのような情報提供の方法があれば良いかという、例えば福祉の分野に関しては島村さんもお存じだと思いますが『心のバリアフリーハンドブック』をNPOと区が協働で作りました。NPO法人ボランティア・市民活動学習推進センターいたばしが作成し、板橋区が8年ぐらい前に発行しました。やはり区民が作ると、きめ細かな情報を掲載することができます。そこで、『不登校ハンドブック』のようなものを区民のNPOが作れば、いろいろな生きた情報を提供することができます。私たち行政の者が持っていない情報を区民は持っています。例えば、どこで、何時から、誰が子ども食堂をやりますという情報などがそれにあたります。

す。『心のバリアフリーハンドブック』を区民による NPO が作成したように、不登校のお子さんと保護者の支援を区民による共助によって推進することは、できないことではないですよ。既に区民による若者支援のネットワークがあるのです。まなぼーとと先に挙げた NPO が、いたばし子ども・若者支援ネットワーク会議を立ち上げ、およそ 30 団体が参加しています。そういうところが中心になって、不登校のお子さんや保護者に対して、情報提供をしていただけると案外簡単に解決できることがあるのではないかとこのところがあります。つまり、区民はネットワークをつくって、どんどんとつながっていますので、区民同士の関係に任せるところは任せるといことがよろしいのではないかと思います。もう一つはお子さんにとって、学校以外の選択肢もあってよろしいということです。つまり、フリースクール@成増代表の久保委員さんが、この場にいらっしゃる理由はそこにあると思います。学校や教育行政の外側では、子どもが育つための豊かな状況があり、それを知らないのは教育行政だけなのかもしれません。私も施設から出て、いろいろと学ばせていただいて、子どもが育つ環境として、学校以外にいろいろな選択肢があると、子どもと保護者にとってしんどくならない状況が生まれると思います。そのようなことをまなぼーと成増の社会教育指導員の戸張さんから、補足していただけませんか。

戸張氏（まなぼーと成増 社会教育指導員）

現在、午前中、不登校の子がまなぼーと成増に来ています。昨年度は、午前午後など不定期でしたが、不登校の子が、やはりまなぼーと成増に来ていました。まなぼーとで、自習したり、私たち社会教育指導員と話をしたりしていました。それがきっかけとなって、もしかしますとそれだけではないかもしれませんが、いつの間にか学校に行けるようになっていたということがありました。何か吹っ切れたのかなと思うのですが、そういう事例がこの 1 年間の中で 3 件ほどありました。まなぼーとでの大人との関わりの中で、自分の何か引っかかるところを消化したのではないのでしょうか。では、その子が学校の勉強について行っているのかということ、そうではなさ

そうでした。その子の友だちに聞いたのですが、勉強にはついていけてはいないけれども、とても楽しそうに過ごしているよという返答がありました。つまり、学習の面で学校に足が向かなくなっている子もいるとは思いますが、学習ではない、別の理由で足が学校に向かなくなる子もいます。友達関係や先生との関係が原因だったら学校には戻りにくいと思うのですが、人間関係ではなく、別の要因で、学校に行けなくなっていたならば、ちょっとしたきっかけで、学校に戻れるということがあると思います。

平戸委員（東京家政大学人文学部教授）

戻ってしまいますが、不登校が問題なのは何故かというすこし過激な問いかけに対して、もう一つのBグループの部会との関連性を考えるのであれば、人生のチャンスがこの不登校ということによって、もし限られたものになってしまうようであれば残念だということが出発点にあるような気がしていて、もし不登校によって心配事が発生するとしたらどんなことというのが、おそらく、このチャートではなかったかなと思っているのですが、今、実際に通ってこられる不登校の子どもたちの話を伺ったのですけれども、例えばですけども、まなぼーとという居場所に来る子どもたちはどのように情報を仕入れてきているのでしょうか。

戸張氏（まなぼーと成増 社会教育指導員）

先程所長からもあったように、私が火曜日に勉強を教えているのですけども、そこに来ていた子が「実は自分は学校に行っていないのよ」というのぱって言ってきて、こちらは「えっ」てなって、火曜日になるとまなぼーとには熱心に勉強しに来ているのですよ。それを聞いてびっくりしまして、保護者を呼んで聞きましたところ実際に学校に行っていないのだと、普段もまなぼーとに通えるようになるようにはと保護者面談をして、この4月からはまなぼーとに来られるようになったのですけども、きっかけというのは前は勉強室と呼んでいたのですが、スタディールームに来たのがきっかけでした。

齋藤所長（まなぼーと成増所長）

他には戸張さんは元区立中学校の校長先生ということもありまして、中学校に出かけて、先生にまなぼーと成増についてご理解いただき、生徒の利用の促進を働きかけていただいています。

戸張氏（まなぼーと成増 社会教育指導員）

それもありましたね。

平戸委員（東京家政大学人文学部教授）

こちらから出かけて、先生方から情報得て、先生方を通じてこんなところもあるよという情報提供というのをベースに行われたということですね。

齋藤所長（まなぼーと成増所長）

教育支援センターのスクールソーシャルワーカーの方が声をかけてくれるというのもありました。また、口コミというのもあります。来所されたお子さんが「ここ、なかなか居心地がいいよ」とか、保護者から、子どもにとって居心地が良く、また、勉強もできるなど、いろいろな方法があります。

平戸委員（東京家政大学人文学部教授）

そうすると先ほど出ている情報はどうやったら伝わるかというあたり、今ある資源を最大限活用していく、充実させていくことというツーステップあるような気がするのですが、新たな居場所づくりももしかしたら充実というふうに入るのかもしれないのですが、そのどうやったら情報が伝わるかというあたりは例えば学校の先生方にご協力いただき、例えば地域の民生児童委員さんにご協力いただき、時には居場所側から出かけて行って様々なお子さんとの関係性みたいなものを考えながら情報提供し、スクールソーシャルワーカーの方々にもご意見をいただきというあたりが一般的にとい

うことでしょうか。

戸張氏（まなぼーと成増 社会教育指導員）

あるいはセンター所長や指導室長から校長先生方を通して、こういうところがあるよということを常々伝えていっているのではないかなというふうに思います。指導室長からは不登校の対応の中にフレンドセンターの件が出なかった時がなかった位、活用してくださいということがあったのは確かです。

平戸委員（東京家政大学人文学部教授）

別に不登校のための居場所ということではないのですよね、自由にお子さん達が利用できる場所ですよということですよ。そこら辺は例えば私のような外の人間から見ると、行政がパンフレットを作っても全然問題ないのではないかと思うのですけれども、そんなことはないのですかね。民間団体しか作れないものなのですか。例えばお子さん方が自由に過ごせる場所というもの、それはいかがなのでしょう。あまりにも行政だとしがらみがある？

島村委員（民生・児童委員協議会 主任児童委員部会長）

パンフレットの話ですが、板橋区主導での居場所というのはそれぞれが情報として出来ていると思います。例えば社会教育指導員が学校に出向きパンフレットを利用して子どもたちに声をかけていただけるとは大変いいことだと思います。そのパンフレット（資料）の中に民間が個々に取り組んでいる地域資源としての居場所についても掲載されると地域情報の一元化となり、幅広い内容の発信となるのではないのでしょうか。ただ、地域情報を収集するのは苦労があると思います。例えば、がんばった青少年を表彰する青少年表彰がありますが、青少年のために頑張っている方々を表彰する機会はありません。がんばっている子どもたちを表彰することはとても良いことだと思うのですが、子どもたちのために努力している方々を表彰する機会があれば、そこに地域情報が集まるのではないのでしょうか。このような活動を通じて子どもたちを支援している人がいま

す。子どものために学習や食堂、親御さんの相談相手などされている人がいます。などそういった各地域の居場所となる情報を収集する仕組み作りが重要ではないでしょうか。実際に不登校児支援の際、必要な情報が家庭にも担任にも届いていない様に感じます。そして、私たち主任児童委員も所管以外の情報はなかなか準備出来ていません。不登校児・生徒を受けとめる居場所は地域ごとに必要です。個々の所管が取り組んでいる情報を含め方策を共有出来れば、新たな解決策につながるのではないのでしょうか。

平戸委員（東京家政大学人文学部教授）

皆さま、様々なご意見ありがとうございます。この後の、意見交換の際にもう少し詰めていけたらと思います。

諸橋課長（地域教育力推進課長）

それでは議事2として、只今の討議内容の発表と各座長の総評をいただいた後、意見交換会を行いたいと思います。それではAグループの発表からよろしくおねがいたします。

【Aグループ発表】

諸橋課長（地域教育力推進課長）

それでは、平戸委員より総評をいただきたいと思います。

平戸委員（東京家政大学人文学部教授）

大胆なチャートで問いを投げかけたわけですが、そもそも「不登校が問題なのはなぜか」というあたりの投げかけが果たして本当にそうなのかというあたりが非常に印象に残りました。私どものほうも申し上げたのはBグループとのつながりでいえば、子どもたちの将来に向けてのチャンスをいかに保障していくかというあたりだと思います。そこにおいては今まで親御さんとしては学校に戻ってほしいというようなことが前面に出てきてというところがあったようなのですけども、そうではなくて些細な進路選択のチャンス

を提供していく、好きなことから入っていったいいのだよという再スタートを切ることをもうされているのですけども、そういうところをすごく心強くお聞きしていただきました。意見としては出なかったのですけども、お願いしたいのですが親御さんにもいろいろな状況があり、子どものことが二の次になってしまっている親御さんもいますし、すごく一生懸命になっている親御さんは子どものチャンスがどうかあると思いますが、もっと単純で当たり前のことを当たり前にしてあげたいというか、学校に行つてという状況が大多数の子ができていく状況で、なんでうちの子はいけないのだろうかあたりの素朴な何か考え方もあると思います。私は、だから親御さんがダメだけではなくて、その親御さんの気持ちを受け入れながらもひきこもって誰とも接点がなくてチャンスを失っている子どもさんに関しては、今ある施設がこれだけあって社会資源がこれだけあって、それを使っていいのだというあたりとか、自分のチャンスを増やすためにこういうのがあっていいのだというあたりをもう少し、やはりせっかくこういう会が立ち上がったわけですから、それこそ情報の一本化を工夫をしていく中でさらにはそのお子さんの状況によってこちらから伝えていく方法、伝えて行き方とかを検討していくことでまずある資源を効果的に使っていくということがすごく大事ではないかというふうに思いました。さらなる充実ということに関していいますと、まだそこまで意見が出なかったのですけど、様々な立場からというご意見もございましたのでそこら辺も次回へ吸い上げていければと思っております。

諸橋課長（地域教育力推進課長）

ありがとうございました。続きましてBグループの方の発表をよろしくお願いたします。

【Bグループ発表】

諸橋課長（地域教育力推進課長）

それでは、児美川委員より総評をいただきたいと思っております。

児美川委員（法政大学キャリアデザイン学部教授）

出たご意見は今ご紹介させていただいた通りなのですが、まず大前提に中途退学は問題なのか、まして中途退学は小・中の義務教育段階ではなく、高校ですので、そのこと自体が問題というわけでは無いけれども、ただそのまま立ちすくんでしまって、次につながらないみたいな状態はやはり不味いので、そうならないためにという議論の出発点の認識としてはあるのだろうということと、最初僕の方でもふりましたけれども、要するに進路選択のあり方と多様な進路選択の機会の提供みたいな話だと、とにかく学校選びとか情報提供とかそういう狭い話になりがちなので、だからそこだけじゃないところをぜひ話をしましょうということで議論をお願いして、いろいろなご意見が出ました。中身については先ほどご紹介させていただいた通りなのですが、私なりの観点でまとめると3つくらいの柱があるなということで、1つはやっぱり子ども自身が中途退学するかもしれない、あるいはそういうリスクがありそうな子どもが、それでもどうやって高校を続けていくかみたいなものの動機付けとか高校に入る時もありますけれどもやっぱり行って見たらって思っていたことと同じことだけじゃないので、そこをどう続けていくかという動機付けの力みたいなことをどう持ってもらうか、先程から出ている将来何がしたいのかという目標だったり、自分自身が何らかのかたちで頑張れる力みたいなものを持っている人はそうだったりみたいなものだったり。あるいはロールモデルを知っていて、そこを使って次を選べるんだみたいなことがわかるかわからないか、そういうどうやったら続けられるのかっていうことを本人が持つ力を意識したいということが1つ。2つ目は、ですけれども、そういう将来の目標だったり、ロールモデルだったり自分が頑張る力だったりみたいなものをどこで身に付けるかということだと思います。その場合に家庭や小・中学校での教育というのも大きく役割を果たすと思いますけれども、主として議論に出たのは家庭や学校はもうギリギリまで頑張っているわけで、ただ、そこだけで収まらないし、支援しきれない子どもが現実にいるのは事実なので、そこはもっと社

会教育的な営みや取組みだったり、地域が出番を持っていてということ、学校だけではない学びの場みたいなことを、とくに今の子どもたちは経験が少ないわけで、その中で多少の困難に当たっても自分で乗り越えて自信をつけていくという様な、そういう機会がなかなかなくて、それを学校生活の集団行動の中で全員へ一緒くたにきめ細かく提供するというのは、難しいわけですから、そういうのはむしろ地域側の出番かもしれません。先ほども申したような動機付けとしての将来の目標であったり、自分が頑張りが続ける力や頑張れる力みたいなものをつける場として地域のそういったものがもっと豊かにあっていいなあそういうことが実は高校中退しなくて済むようなことが伝えられるのかもしれない、集団とか人間関係が苦手な辞めるとかそういう子もいるわけですけれども、やはり小・中学校へ同じだけ通って、そこに強くなれと言われてもなかなか厳しいと思います。そういう場合にはもちろんそうでは無い場所でちょっとずつ経験値を上げていくのがいいのかもしれませんが。そんな議論がありました。3つ目は、そういう力が必要でそれを育てる場として、家庭・学校はもちろんであるけれども、それをさらに幅広く包み込んだ地域の力や社会教育的なもの、そういったところを踏まえた上で最後はもう一つそれでも、どういうふうに高校を選んでいくかみたいな学校の見方というか、見極め方というかその子に合った学校を本人もですし保護者もどうしたら選べるのか、みたいなところが最後の出口のところでは、議論としてあるのかなあとということで、例えば先日、行われた不登校の子をターゲットとした学校説明会をやったら割とニーズがあったとかそういうことをやれる範囲でという事はかなりできると思いますので、その問題があるのかなあと考えています。ただ、さっき向こうの議論では出なかったのですが、僕が気になっているのはそういう学校の選び方みたいなものその子にふさわしいほんとにふさわしいあった選び方みたいなものをするとき多分中学校は教えられた通り、そんな無理強いはしないと思います。多少学力とかとか気にするにしても。同時に学習塾だとかなんてところは、おそらく無理強いはしないまでもあなたはその学校は行ける、行けないをはっきり言っているわけです。そ

うというような問題だとか、あるいは私立高校は私学についての授業料助成とうとう始まって以降公立高校の生徒をどう食っていくかという話に向かっているわけですから、当然私学はそういうやり方しているわけです。そういう情報も当然届いているそれは別に全日制の私学だけではなく広域通信制みたいな学校もそうだと思うのですがもちろん広域通信制を否定するわけでは無いですがでも本当にその子に合っているのか十分吟味されていなくて、良い場面はたくさん見せられていますよねそういう中での進路選択になると思うので、先程言ったちゃんと地道なレベルでやるという事としかし世の中では支配的な価値観になっている学習塾の宣伝とか私学の売り込みみたいななんかそういうものとどう対応していくかという問題も一つあるのかなという気がしました。

諸橋課長（地域教育力推進課長）

ありがとうございます。それでは最後に残りの時間を使ってこの2つのテーマを一体的に考えたいと思います。フリーでお話しただければと思います。ご意見ある方どうでしょうか

齋藤所長（まなぼーと成増所長）

高校に入学する際に、中学校卒業後の15歳で入学することを前提としない入らなくても良い仕組みがあるのか、ないのか、また今後、そのようなかたちになっていくのか。15歳で高校に入学しなければならないような前提が続くと高校に進学し、卒業することがしんどいかもしいれない。そこで中学校卒業後1年バイトしようだとか、他に何かしようだとかして、高校に進学をするという選択肢が取れるようになるのか。

梶野氏（東京都教育庁地域教育支援部 主任社会教育主事）

考え方としては本人の気持ち、目標が設定されてからいってくれた方がありがたいというのが基本だと思います。子どもたち自身の選択として、まず高校へ進学したいというには言います。遠回りしても自分のやりたいことを考えたいって子はある意味自己決定力が

高い子だから、それを尊重するというのはそれでいいと思います。ただ、大概の子はどんな状況でも高校には行きたいと言います。何がしたいとかではなく、みんなが行くからだとか。不登校の子でも行きたい、その中にはやり直したいという意味も含めてなのかもしれないけれどあるわけですよ。今日、進路指導の話を聞いてびっくりしたんですけども、中学校ってこんな寄り添い方の進路指導するのかということ、やっぱり学校の先生たちだけでやるのではなくて、多様な社会とか大人が関わる場をどう作るかということの方がそういうふうなことから考えた方がいいのかなというふうに個人的には思います。

諸橋課長（地域教育力推進課長）

関連して1個だけ、平沢所長にお伺いしたいのですが、先ほどフレンドセンターは決して学校に戻すための場所ではなくていいのじゃないかというお話があった中で、フレンドセンターに通う子どもたちは高校を目指すのですか、それとも、その選択も自由なのですか。

平沢所長（教育支援センター所長）

中学3年生でフレンドセンターに通おうとする生徒たちの大部分が、高校には行きたいと思ってきています。

諸橋課長（地域教育力推進課長）

高校を目指していくわけですね、ありがとうございます。

野幹事（まなぼーと大原所長）

居場所についてのAグループと追究が重なっているなと思ったことなのですけども、そのスイッチを入れるということはどうやっていくかというあたりがすごく重なっているなと思いました。省略されちゃったかたちなんで、スモールステップという話がずいぶんこちらの方で大事だという共感がグループとしてあったと思います。つまりは目標としてすごく立派な目標を出させるようなシステムが

動いている。高校でも大学でも作文を書いてそれが立派だとそこに行けるのだけでも、でもすごく良い作文を書いた子が、転学するというケースは結構あります。それはなんでなのかなというところとスモールステップで実感として自分がこれをやっていくのだということと乖離している部分があるのかなという話が出ていた。多分居場所の中でも、まさに居場所というのがそのスモールステップをどうやって積めるのかということになってくると、この進路選択という部分と噛み合ってきて相乗効果が出てくるのではと、今の話を聞いていて思いました。

松澤委員（教育委員）

多分、議論が深まれば深まるほど、答えというものは見つからないんじゃないかというふうに思います。皆さんのご意見を聞いて、やはりその子によって問題は違うわけですが、不登校のお子さんがいれば、不登校から高校に向かったけれど、退学してしまったり、転学をするってところで答えというものが無い世界の中で、自分の選んだ道を信じて進める、最後は自分を信じる力になるのかなというふうに思います。そういうところを今後、どうやったら子どもたちがそういう気持ちになっていけるのかなということを私自身は課題として持ち帰っていかうかなというふうに思いました。皆さんのご意見は皆さんの立場立場で、全然違うのですが、板橋の子どもたちを含めた社会にいるお子さんを、悩んでいる子たちを救いたいという気持ちはみんな一緒だと思うので、そういった面で行政としてそこで何ができるかということも議論していただければいいのかなというふうに思いました。

諸橋課長（地域教育力推進課長）

居場所の話の中で、学校に行けてない子たちは、学校に戻るべきなのか、そうではない別の道もあるのかということは、すごく大きな話だと思います。親の気持ちに立つと、戻ってほしいという気持ちもわかりますし、自分に置き換えた時に不登校の子どもに対して、大丈夫だよと言えるのか、日本の社会の仕組みの中で学校に

戻った方が幸せになれるのかについては、非常に難しく私の中でも答えは出てないです。自信をもって「大丈夫だ、こい！」という居場所もあって、そこでしっかり支えてくれている人たちについては大変心強いですし、学校で何とか戻って、もらおうと努力される中で、学校のルートを歩んでもらおうとする、そちらの努力も必要です。それに対して行政はこっちだよとも言えないし、でも、どっちだよと言わないと道に迷った子どもたちは救えないだろうしというところでは、おっしゃる通り答えは無いですよ。そういう中で、今回の提言ではそこに一筋のはっきりとした正解は出せないのかもしれないですが、少なくとも今、道に迷った子どもたちが、生きる力を付けて一人の社会人となって幸せな人生を送るための支援の仕組みとして区が出来る小さな何か、それこそスモールステップみたいなことが示せるといいなというイメージとしてはあります。久保委員はどうでしょうか。

久保委員（フリースクール@なります代表）

いろんな手段といろんな選択、居場所だったり支援だったり選択肢だったり、最終的に経験とかいろいろありますけれどもそれって結局は最終的に何を目標しているのというところと本人たちが主体的に考えて決める力を身につけることにつながるのではないかと思います。そのためにどれだけの支援を大人たちであったり、区であったり居場所や経験をできるような環境を整えるということが全部その子たちの主体性を育てるところにうまく集約するのではないかとお話を伺っていて感じ、どうやって皆さんと考えて行けたらいいのかなというふうに思いました。

諸橋課長（地域教育力推進課長）

ありがとうございます。浅見委員はいかがでしょう。学校側からはどういうイメージで捉えていますでしょうか。

浅見委員（小学校校長会会長）

お話を伺っていて、最終的には一緒に考えていかないといけない

内容なのだということ、スモールステップという言葉がありましたが、我々のほうは居場所ということに絞って考えたのですけれども、進路のことを考えていける居場所といったあたりを考えて行けたらとお話を伺っていて思いました。最初の方の話に戻りますと、不登校が1つの選択肢としてあって、そこにどんなサポートをしていけるかということ、考えていかないとダメなのだ、社会に出るためのベースキャンプなんて言葉も出ましたが、なるほどなあと思いつつ目が覚めたような感じでした。そのあたりを大事にしながら子どもたち、それぞれの長い人生ですから、先を見る力をどうやってつけていくかといった視点で、居場所であり進路でありを考えながら、どのタイミングでどんな大人がどのようなサポートをできるかというあたりを整理していくと良いのではと考えました。

諸橋課長（地域教育力推進課長）

ありがとうございました。島村委員も地域の視点で総括するとどのような感じでしょうか。

島村委員（民生・児童委員協議会 主任児童委員部会長）

現時点で不登校支援をしているお子さんが何人かいます。支援する際、主任児童委員として学びが少ないなということを実感しているところでもあります。支援家庭を何とかしてあげたいと思う気持ちが強くなり、つい自立の部分までを支援してしまうと、基本的にその家庭の依存度が増えてきてしまいます。極端な事例を挙げますと、支援者が朝迎えに来てくれないから学校に行けないということになり、不登校はまるで他人のせいとなります。家庭で登校出来る様に家庭環境を整える努力をしているか否かという家庭の問題としてとらえられない場合もあり、支援の方法は重要です。また、他の子は学校に行けているのに、なぜうちの子は学校にいけないのか、私は子育てを何か間違ったのではないかと、子育てについて自分自身を責めている親御さんには心に寄添う事も必要です。親御さんは努力をしているが、子どもが求めていることと親が子育てとして努

力していることが噛み合わなかったりすると、家庭の中に歪みができてしまったりもします。子どもは直感的に、親が悩んだり困っている姿に対して心を閉じてしまったり、伝えられなかったりする場面があります。時に子どもの心をストレートに聞くといったことが私たちの活動にとって大切な支援の一つでもあると感じます。その上で、不登校支援で朝迎えに行ってから、学校に行くか行かないか行きたいかどうかというところを含め子どもの話を聴いてから登校する様にしています。もちろん親御さんには区内の居場所として、フレンドセンターがあることも伝えていきます。また、兄弟のある家庭では不思議と兄弟とも不登校になる傾向があり係わりが複雑になります。私学を選択した中学生の場合、学校の先生とは連携が持たず、学校での生活状況など一切不明ですので支援は難しいです。親御さんは保護者間の連携も地域に無いので、学校へ行かせてくれるところに子どもを預けたいと切羽詰まったりします。不登校は子どもだけの問題ではなく、家庭問題でもあります。勿論私たちもスキルを上げて情報を享受し速やかに発信していく必要があると感じています。現在、天津わかしお学校やフレンドセンター、学びiプレイスを見学させていただいているところです。子ども自身が社会の中での居場所を見つけ自立する力を学び身に付けて欲しいと願っています。最近、福祉事務所の力が大変大きいと感じました。都立高校から転学した高校生がアルバイトを始め、そのお金を貯金しています。これは福祉事務所の担当者の力添えのお陰です。何のために貯蓄をしているかというのと、将来の目標のため、高校卒業後に資格を取得するための準備金です。自分でお金を準備しなければならない環境で一生懸命アルバイトをしながら学校に行き、自分の将来を切り開くための選択ができたことは素晴らしいことです。これは支えてくれる力があつたからこそ実現できています。まだ高校生ですから1人では心が折れてしまうかもしれない、どうしていいかもわからなかったはずですが、そこを支える福祉行政の力は本当にありがたいと思いました。

諸橋課長（地域教育力推進課長）

時間もオーバーしてしまい、みなさん全員にお聞きする時間が無いのですけれども、指導室長いかがでしょうか。

門野幹事（指導室長）

Aグループの中で、教育機会均等法が制定されたことにより、不登校はもはや問題行動では無くなったという意見がございました。それと同じように高校を退学することだけで問題なのかということについても考えなくてはいけないと思います。その観点で進路指導どうこうという話をしていると、この問題は違うのじゃないかと思えます。私たちが子どもたちに身に付けさせようとしているのは、キャリア形成能力というか、そういった力だと思います。なので、今、島村委員がおっしゃったとおり、その子がどのように生きていこうとしているかというもののの中の選択として、学校が合わなければ辞めるという選択肢は当然良い選択であって、それをもって否とするような話は果たしてどうなのかなというふうに感じています。先程の不登校の話もそうなのですが、この進路の話も報告だけで詳細を知っているわけでは無いのですが、お話を聞いていてそう思いました。例えばBグループの話でいうと高校中退させないために必要な育成をしていくという話をするのか、中退してしまった子どもたちに支援する仕組みがないからこれをどうしようという話をしていくのかというところで、だいぶ違うのではないかというふうに思っています。不登校についても不登校って単純に30日以上休んだら該当するのですが、学校って1年間で10カ月くらいなのなのですが、10で割ると月に2、3日休むと不登校なのです。月に2、3日って2週間に1回程度休んでしまうと不登校なのです。そういう子どもたちの話をしているのか、本当に全く家から出てこないそういう子どもたちへの居場所づくりを考えていくのか、それとも学校はたまには来るけどなかなか来られなくて様々なところに行っているのだけれども、それでは学習の補填ができないという子どもたちへ、更に補えるような居場所づくりをしていくのかという、どちらの話もターゲットを絞っていかないかとあと1回ではまとまらないのではないかなと感じています。

松澤委員（教育委員）

今の室長のお話非常にわかりやすい説明だと思ったのですが、私ちょっと反対の意見になってしまうのですが、予防とそうなったときの対処といったところで違うのじゃないかなと思います。だから本来学校に行ける子が行けなくなった場合の対処の方だけやるっていうことも私はちょっと違うのではないかなと思っています。基本的には学校に行っていたきたいと思っていますし、子ども達も学校に行ったほうが良い、行きたいという声もあるわけですね。ただ、行けない理由というのはいろいろありまして、行けなかった場合にそういったことがあるので、そういう場合にはそういうことにあった対応も必要で、そうならないように予防する必要も、予防というか学校に行ってからキャリアを形成するという方がいいのじゃないかと、全体的な例を見てもそうだと思うのですが、けれどもそういったことを目指していくべきなのじゃないかなと私の意見ですけど、一意見ですけどもそう思います。だから、両方必要なんじゃないかというふうに私は思っています。

諸橋課長（地域教育力推進課長）

ちょうど議論が深まりつつあるところで、もう少しすると何か見えてきそうな気もするのですが、時間の都合もありますので、最後に児美川部会長に次へのつながりも含めてお話いただきたいと思えます。

児美川委員（法政大学キャリアデザイン学部教授）

皆さんお疲れ様でした。私、大学の教員なので、研究者ですから1つの正解があるわけではない問いをみんなで探求して、何か考えたと思ったら、さらに次の問いが出てきて深まるといったような議論は大好きなので、ただ、大好きなので、それをやっていたら、次回、何かまとまるという気がおよそしないので、ちょっと議論の仕方を考えなきゃいけないかなと思ったのです。今ご意見をお聞きしていて要するに最終的には提言といったかたち

でまとまった報告にしていくためには、次元を分けなきゃいけないという気がしました。

1つは基本的な考え方みたいなところですか。不登校ってどう捉えればいいのか、中退っていけないことなのか、そうじゃないのかみたいな。そこについて一定の考え方を出さなきゃいけないっていう気はやっぱりするのですね。もちろん子どもたち若者達が学校っていう場が嫌で逃げ回って回避したとしても、高校を含めてです。でも最後は社会に出ないわけにはいかないと思うので、そこがゴールだと思うのです。その場合に逃げ回った場合にこういう手段があるし、こういう支援があるし、学校にいった場合にはいった上でもこういうものがあるみたいな、大きな緩やかに包み込むような基本的な考え方みたいなものを出すことがひとつの次元として必要で、その上で2つめにはもうちょっと踏み込んだ各論に入る。どんな力を身につけて欲しいのかとか、どんな支援があり得るのかとか、さっきのスマールステップという話とか、家庭のこととか。今回、提言の3つの柱の中に家庭と言う言葉は無いですが、やっぱり抜けないですよ。だからそういった問題だとか問題提起的なのは真ん中のレベルくらいです。1番最後は、3つめですが、1番ブレイクダウンして、具体的にやれそうなことを、区としての具体的な施策・政策みたいなかたちで出す。それはもうほんとに具体的な話だと思うのです。次元を分けなくて、例えば3つ目の話をしているのに、急に1つ目の基本的な考え方を出してきても議論にはならない。そんなあたりを次回は整理をしながら議論したほうがいいかなと。具体的に今は何もしてない状態だとすると、やれる事はいっぱいあるはずなので、それはそれでちゃんと出しきって何とか今年度を終わりたいというふうに思いました。

諸橋課長

ありがとうございました。最後に議事3「その他」について事務局よりお願いいたします。

事務局

-業務連絡-

諸橋課長（地域教育力推進課長）

次回は9月6日(金)午後6時30分から、場所は教育支援センター研修室となります。次回を経て、提言の素案を取りまとめて、第二回全体会が12月20日(金)を予定しておりますので、こちらに専門部会としてまとめたものを提示するということになります。その他、皆さん何かございますでしょうか。

【質問等なし】

これを持ちまして本日の会議を終了とさせていただきます。長時間ありがとうございました。

【閉会】